論　文

成熟社会の様相と表現―文化経済学の視点から

駄田井　　正
夏　　広　軍

要　旨

人類が直面している危機を回避するには，人口と物的消費の成長を抑制しなければならない。その上で生活の質を高めるにはどうするかであるが，その糸口として，ガボールの「成熟社会」は示唆に富んでいる。彼の成熟社会の様相を文化経済学の視点から考察した。そうするとその社会は，経済力よりも文化力に力点をおくことになる。そして，文化力について，日本文化との関係，ならびに近代化にともなって崩壊してきている地域コミュニティの役割について考察した。日本文化は文化力の向上に寄与する性質を有すると考えられる。これは仮説として検証するのに値する。地域コミュニティも文化力を高めるものと考える。これもまた仮説として検証する意義があると考える。

１．はじめに

成熟社会とは，成熟社会（mature society）という言葉を最初に使ったと言われるデニス・ガボールによると，次のようである。「人口及び物質的消費の成長はあきらめても，生活の質を成長させることはあきらめない世界であり，物質的文明の高い水準にある平和なかつ人類（Human species）の性質と両立する世界である。この最後の条件は非常に厳しいものである」[Gabor（1972，邦訳p. 5)]。

成熟社会という言葉を使用していないが，このような社会を想起した人たちは少なくない。J.Sミルの「定常状態にある社会」(1) は明確に論じた最初のものであると思われるが，J.M.ケインズもJ.K.ガルフレスもダニエル・ベルも同様の社会について言及している。

ガボールの著作以後，1990年ぐらいまでは，成熟社会についての論述は数多くみられるが，それ以降下火になった。それは，ソ連崩壊などに政治上の大事件や通貨危機など世界経済の不振が続き，経済再建が最優先の課題になったことが大きい。(2) しかし，近年，地球温暖化による気候不順など，環境問題が深刻化し，人類社会の存在が危機的状態にあるのとの認識が高まることにつれて，成熟社会という想定への関心が高まるものと予見できる。本論は，ガボールの成熟社会を出発点として，現状の危機を克服するものとしての成熟社会の様相と現実の社会との対比を結ぶ表現を考察する。

2．成熟社会の様相

人類存続の危機を回避する選択肢として「成熟社会」をとらえたとき，それはどのような様相をそなえていなければならないだろうか。人類存続の危機は，①核の脅威，②気候変動，③資源の枯渇，④経済格差の 4 つに集約できるだろう。日本の場合はこれに加えて，過密過疎，少子高齢化などが加わることになる。

一方，前述したガボールの成熟社会の表現は，

1）人口及び物質的消費の成長をあきらめても，生活の質の向上を目指す。

2）物質文明の高い水準

3）平和と安定

4）人類の性質と両立する世界

と分割できる。順次両者の関係を見ていこう。

(1) 人口および物質的成長と生活の質

人口の増加と物質生産の成長は，気候変動と資源枯渇に関係することは現在如実になっている。人口増加と物質的成長を停止しても生活の質を高めるには，生活の様式すなわち生活文化の在り方に関係する。要するに生活の物質資料をいかに効率よくより満足の高い生活，あるいは人間の幸福（well-being）に結びつけるかである。ガルブレイスは『豊かな社会』[Galbraith（1960）] の日本版序文で次のように述べている。

> 生産が欲望を充足するばかりでなく欲望を育成するものであるとすれば，生産の拡大は，経済成長や，とくに社会的進歩の満足な尺度ではないであろう。ある物の尺度はその物以外の物でなければならない。進歩の他の指標を生産以外のものに求めなければならないであろう。

この関係は，文化力という概念を導入することで論点が整理できる。ここで文化力とは，富（物質的豊かさ）を生活の豊かさ（幸福，well-being）に変換する能力と考える。何らかの方法で数量化できるとすると，もっともこの作業は容易ではないが，次のように表すことになる。[(3)]

$$\text{文化力} = \frac{\text{生活の豊かさ（幸福度）}}{\text{物質的豊かさ（富）}} \qquad (1)$$

この文化力には，様々な要因が含まれることになるが，個人的な文化力とするか，グループ，社会全体として考えるかによって，加えられる要因が異なってくる。

個人的な場合では，少ない物的生活資料で幸福に暮らせることができるのは，その人の精神が成熟していると考えてよいだろう。人間の場合，肉体的に成熟する年齢と精神的に成熟する年齢にはギャップがあり，両者が成熟してはじめて人間として成熟するということになるだろう。

経済学の一分野である厚生経済学の伝統に従えば，生活の豊かさは厚生一般と呼べるものであるが，物的豊かさは経済的厚生と置き換えてもよいかどうかは，微妙な問題である。ピグーによれば経済的厚生は貨幣価値に換算できるものであるが，実際に価格が付けられ市場に流通している場合と，疑似的に換算する場合とは意味が異なる[(4)]。

個人の場合の経済的富は，個人の所有物か，使用に貨幣を支払っているものの合計であるとしても，道路などの公共施設は無料で使用している。この場合，文化力は無料で利用できるインフラが充実しているほど高いということになるだろう。

社会全体としての幸福度となると，個人が無料で使用しているインフラも，社会全体では負担しているので，社会全体として使用している富となるので，分母に加えられることになる。しかし，社会全体の幸福度を厚生経済学における社会的厚生関数のように，個人の幸福度の関数とすれば，社会全体でインフラ（公共財）を負担していても，無料で使用できるインフラが増えるほど，そうでない場合に比べて，社会全体の文化力も高くなるかも知れない。

文化力を定義した（1）式を書き直すと次のようになる。

$$幸福度＝文化力×物的豊かさ \qquad (2)$$

したがって物質的消費の成長はあきらめたが生活の質の向上を目指すのであれば，文化力の向上によって，幸福度を高めることになる。よって，成熟社会の課題はいかに文化力を高めるかになる。

（2）物質文明の高い水準

ガボールの著書『成熟社会』を翻訳した林雄二郎氏は,『成熟社会日本の選択』（中央経済社　1982年）を著しているが，その中で，歴史を振り返れば成長期と成熟期を繰り返しているとしていると述べている。日本の場合，13，4 世紀頃のいわゆる戦国時代から江戸時代の初期までは成長期であり，鎖国下の江戸時代は成熟期である。この二つの時期は農業社会であった。明治以降1960年代の高度成長期までは成長期，それ以降21世紀の初頭までは成熟期である。この 2 つの時期は工業社会である。そして21世紀はポスト工業社会の成長期としている。つまり，農業社会，工業社会にもそれぞれ成長期と成熟期があるとしている。

しかし，この場合での成熟期は，ガボールの言う成熟社会であると言えるかどうか。それはなはだ疑問である。農業社会の成熟期は工業社会の成長期へと脱皮していったのであるから，結果としては人口と物的消費の成長をあきらめていなかったことになる。農業社会から工業社会への脱皮は，物的消費への欲望を充足するという心理的要因よりも，西欧列強の圧力への抵抗という社会的事情によるとしても，結果的にはパンドーラの箱は開けられたのである。そしておそらくは一般的には，農業社会から工業社会への脱皮にともない，人間の幸福感は向上したのではなかろうか。(5)

そこで問題になるのは，物質文明の高い水準というのをどのように判断するかである。まず第１は，この判断は個人的なものでなく社会全体として考えるべきである。もっとも，文明の水準という時には，それは個人や社会の一部分でなく，社会全体に使用されることである。(6)

近代以前の古代や中世でも，一部王侯・貴族は物質的には豊かであったろうし，知識や教養という点では，現代の平均水準よりもはるかに高い人達は存在していた。農業社会であっても，衣食住の生活物資に恵まれていて，幸福の増進は精神的文化的な要因に求める人たちは少なからずいたことは確かである。だが，その一方で，生活物資の欠乏に苦しんでいる人たちも多数いたと思われる。

物資文明が高い水準に達しているかどうかの判断基準として有効と考えられるのが，「幸福のパラドックス」に社会全体が陥っているかどうかである。

幸福のパラドックスとは，経済の成長と人々の幸福感が相関しない状態である。文化経済学の基本公式（2）にしたがって言えば，経済力の成長が文化力の低下を引きおこし，幸福感が低下する事態となることである。このことに関しては，様々な実証研究が存在する。(7)

物質文明の水準に関するもう一つの重要な判断基準は，これ以上の経済発展は社会や世界全体の持続可能性を危険な状況に陥れるかどうかである。これはまさに人類が現在直面している状態である。世界中のすべての人が物質文明の高い水準を享受しているのではないが，世界全体の生産能力はそうすることが可能な水準にあると考えられる。問題は何をどれだけ生産するかである。

戦争のための軍備に資源や人材を使うことや，称賛に値しない贅沢に資源や労力を大量に使用するなどが，物質文明の恩恵を受けられない人々を生み出している。

このようなことからくる政策的帰結は，成熟社会ではマクロ経済政策は効力を失うと同時に，場合によってはむしろ社会の長期的な健全性を損なうことになる。成熟社会では，その度合いは各人によって異なるが，必要な生活物資は充分普及しているので，政府が財政を発動して総需要を喚起しても，大きな期待ができない。需要が喚起されても一時的なあぶくのようなものである。(8)

（3）平和

消費文明が高度な水準に達し，幸福のパラドックスが発生するような状況にある成熟社会では，経済的利益を得ることを目的にした戦争はまったく意味がない。またガルブレイス[Galbraith（1958, 邦訳 p.156.)]によれば，「高い生活水準をまもることが，アメリカの戦争の目的であるとすれば，戦争のために高い生活水準を捨てることは，矛盾である」としている[(9)]。敗者になれば悲惨だし，勝者になって一層の経済的利得を得ても幸福の増進につながらない。戦争状態になれば，人々の自由は束縛され，日常生活は窮屈になり，死の危険が身近になり，肉体的・精神的ストレスは大きい。

戦争は当事者にとってウィンウィンの関係ではなく，敗者の損失が勝者の利得になるゼロサムゲームの性格をもつが，成熟社会では戦争はゼロサムゲームでもなくマイナスサムゲームになって勝者も得をしない。

それでも現在の世界では紛争が絶えない。それは産軍複合体が存在するからである。人々は戦車・戦闘機・軍艦を造っても，人々の日常の暮らしに役立たないことはよくわかっている。しかし軍需産業に関連する諸集団に経済的利益を与えていて，世界の全生産の5～10%はあるといわれている[(10)] 複合体を取り除くとどうなるかを推計し，それをどう安楽死させるかが必要だろう。[(11)]

戦争や軍隊は，冷静に考えれば，過去においては人類社会に有益であったかも知れないし，現在においてもある種の有効な役割を果たしているかも知れない[(12)]。しかし，現在においては，戦争は人類の存続を脅かす大きな脅威であることには間違いがない。そして，軍隊が果たしている役割，あるいは戦争が果たす役割を別の平和的手段で代替する知恵を人類は充分蓄えている。[(13)]

(4) 人類の性質と両立する世界

ガボールはこの要件がもっとも難しいと述べていて，人間の特質として，次の2つをあげている。

1）人間は逆境のなかでは強いが，安楽，富裕，安全のなかでは弱い。

2）人間は努力せずに得たものは大事にしない。

成熟社会は，安楽，富裕，安全である上に，ロボットやAIなどを駆使して高度な生産技術で労働の苦労を軽減させる。そうなると人間の弱点であるこの特質が発露されるだろう。それが度を過ぎると，勤労意欲達が削がれ「成熟社会は先進国病である」[(14)] との言い方もあるように，成熟社会そのものの持続が危機にさらされる。これをどのように回避するかが一つの課題である。ガボール[Gabor（1972,邦訳 p.79)]は，次のように述べている。

> もはや経済的には連携と犠牲が必要だという圧力がない状態において，その連帯と犠牲をどのようにしたら建設的方向にもっていけるか，それが，この書物で論じる重要な問題の一つである

筆者はこの問題に対処するには，人間の特質として，ガボールも触れているが[15]，人間のもう一つの次の特色を活かすことにあると考える。

3）人間は能力も好み（感受性）も，経験の度合いも，したがって考え方も多様である。

人間は楽しいことが好きであり，自分が好きなことは，苦労も厭わず，寝食を忘れて没頭する。そして何が好きかも十人十色で，それぞれ人によって異なる。したがって，それぞれが自分の好みと能力に応じて，好きな暮らし方，好きな道を歩むことができれば，成熟社会であっても気力に満ちた活き活きとした社会になる。

このような社会を実現するには，人々がこのように生きるのだと意識して，それを受け入れる人格が養わなければならない。そしてそれと同時にそれを保障する社会体制がなければならない。

3．成熟社会における人格と教育

成熟社会の人格

現実の世界は，特に先進経済国では，実態は産業構造をみてもサービスが主体の成熟社会の様相になってきている。大事なことはその意義を理解することである。そして成熟社会であるためには，それを構成する人たちの大部分は，成熟社会を意識し，成熟社会にふさわしい人格を有していなければならないだろう。ガルブレイスの言葉を借りると[16]，

> 自己欺瞞によって乞食のように振舞う金持ちは，財産を保全できるが，それほど幸福ではなかろう。過去の貧困な時代のルールに従って物事を処理する富裕な国も，機会をみすみす失うことになるばかりではなく，自己認識を誤まっているために，困難に際して間違った解決策をとることになるだろう。

となる。

人間の成熟は肉体的成熟と精神的なそれとは成熟時期にギャップがある。肉体的には18才ぐらいまでに生殖能力がそなわり成熟する。18才で法的にも成人とみなされるが，しかし精神的には未熟さが残る。成熟社会にふさわしいと考えられる人格は次のようになるだろう。

1）経済力よりも文化力の向上に力をいれる。

営利団体に所属しそこに経済的基盤をおいていても，個人としてはその資産を経済的利益のためよりは，個人あるいは社会的な文化力の向上に使用する。資本主義経済にあっては，営利企業は利潤の獲得を目指すのは，一定の利潤がなければ存続できないので，禁じ得ないところである。

しかし，成功した経営者は文化事業に関心が高い。美術品のコレクターとして，収集した美術品を美

術館に展示して公開している実業家は多い。企業経営と芸術は，イノベーションの能力という点で関係がある。有名な経営学者のドラッカーも美術に造詣が深かった。

したがってまた，ポスト工業社会にあっては特に文化力は，文化産業の振興とあいまって地域の集客力を強化し，経済力をも高める。

2）人間の性質を熟知している

人間の強さも弱さも熟知し，イデオロギーや原理主義に偏重せず，矛盾があっても無理に合理化せずに，それはそのまま向け入れる度量があり，人間の多様性を容認する。したがって，人間の多様な文化が共存することこそ，人類社会の持続を可能にするものであることを，生態系の持続が種の多様性に依存することとともに完全に理解している。

3）異質性を尊重し多様な生活文化圏の共生と権力耽溺者の排除

成熟社会の特徴は人間社会を持続可能にすると考えられるが，個人の自由が尊重され，各人が各自の好みに応じて好きな人生を選択できる社会であり，多様な生活文化圏が共生する社会である。異質なものを排除するのではなくむしろ尊重する社会であり，競争よりも共生，住み分けの社会である。

したがって，社会をむやみに画一化しようとする圧力は成熟社会の存続を危険にさらすので，他人を自分の権力に従属させようとする意志をもつ権力耽溺者が権力をもつと問題である。権力耽溺者は人々を自分の思うままに操ろうとして規律にしばる。そればかりでなく自分の権力を固めるために戦争を仕掛ける。このことは歴史に数えきれない事例がある[(17)]。

成熟社会の教育

このような人格の形成には教育のあり方が大きく関わるが，体験の裏付けが必要である。それで，現代の経済生活，物質文明の高い水準のありがたさを理解するため，かつての生産技術での生活を体験することが考えられる。ガブールはその一例として「ロビンソン・クルーソー・コース」を提唱している。それは次のような技術の進化過程を学習するものである [Gabor（1972，邦訳 p.190)]。

狩人としての人間･･･こん棒，やり。そして最初の偉大な発明である弓。

道具作成者としての人間･･･石の斧。鉱山から金属を抽出すること。銅，青銅，鉄，最初の鋼のナイフ。青銅と鉄の鋳造。鋼を鍛えること。迷信から科学へ。圧延工場。最初の工作機械，そして近代的な自動機械への進化。

繊維･･･紡績と手織り。初期の天才のおどろくべき例である最初の織機。動力織機。自動のジャガール織機。人造繊維。ナイロンの発明，ナイロン製品の大量生産。

自然の力を動力に利用すること･･･水力と風力。最初の蒸気エンジンから巨大なタービンへ。そして原子力。

輸送･･･馬と牛車。最初の鉄道と最初の自動車。飛行機の発達。（船）

市民が日常生活で必要とする物ーきれいな水，電力，食物，住居，着物，ラジオ，テレビ，自動車などーがどのようにつくられるかの水平的見方。

この教育課程は不効率と苦労をともなう経験であるが，一方で便利で快適な生活になったことで失った何かを感じる体験ともなるだろう。手づくりのおもしろさや，スポーツ感覚での肉体労働や，通勤・通学路が素敵であれば散歩道でありジョッギングのコースやサイクリングコースにもなることや，畑仕事もガーデニングの趣味的活動になることを気付かせるだろう。 したがって，成熟社会にふさわしい人格形成のための教育は，遊ぶ，学ぶ，仕事が一体的になって習熟できるものになるだろう。このような教育は学校制度を主用体にした日本の教育体制では，難しい [筑後川入道（2021,第 1 部第 3 章)]。

4．多様な生活文化と複数のユートピア

経済が不振な国から裕福な国への移民や難民が増加していているが，その原因は，政治的な要因に帰せられることもあるが，市場経済の侵入にともない伝統的な生活が維持できなくなったことが大きい。同様に，日本国内でも，急速に過密過疎化が進展しているが，その最大の要因は，生活スタイルが都市型になってきたことに起因する。

従来の田舎型の生活スタイルを維持できなくなってきたことが，過疎化の原因であるので，田舎を都市化して解決できるかというとそうはいかない。すでに過疎化し，人口の集積度に大きな違いが生じているので，都市化は不可能だ。都市型の産業は立地できない。

日本の田舎は総じて自然が豊かで水資源も豊富である。これらの資源を活用し，IT 技術などをも活用して，田舎にふさわしい生活スタイルと市場経済一辺倒ではない経済体制を創生することが考えられる。そうすると都会生活とはまた違った質の高い生活を手に入れることができる。それが筑後川入道の複数のユートピア構想である[筑後川入道（2021, pp.279-280]。

その構想では，自然への対応，生産技術の選択，市場経済への依存具合などに応じて，5 つの異なった生活パーターン地区（A～C，Y，Z）を提示している。

A地区：狩猟採集の暮らし。自然へのほぼ完全な依存。

B地区：伝統的な小規模農業。沿岸・淡水漁業，環境保全・防災と一体化した林業。

C地区：半農半X，半漁半X，半林半X，Xとしては，芸術，スポーツ，教育，観光，そしてIT関係もリモートワークの範囲で入ってもいいだろう。

Ｙ地区：環境に配慮した自立的な田園都市。

Ｚ地区：人工的なグローバル都市。

当然ながらＡ～Ｃの地区は，自然への対応という点では，できるだけ自然に手を加えないようにする。そして，人々の暮らしもコミュニティ経済圏での贈与，物々交換それに地域通貨が使用され，市場経済への依存は限定的である。Ｚ地区はグローバルな市場経済圏に属する。Ｙ地区はＺ地区とＡ～Ｃ地区の緩衝地区となっていて，グローバル経済の弊害が直接的にＡ～Ｃ地区に及ばない役割を果たすとともに，最先端の医療や情報・技術の恩恵をA～C地区の住人が利用できる便宜を与える。

人びとは自分の好みに応じて好きな地区に居住する。複数の地区に住むのも可能である。人は年を経ることで感じ方も考え方もかわるので，年代に応じて居住地を変わるのも自由である。これらの多様な地区が共存することで，人々の幸福感をたかめ全体社会の持続を可能にする。

これらの地区が共生していることが，成熟社会にふさわしい人格形成と教育に，実践的役割をはたす。

5．日本の文化と文化力

日本の文化が富を幸福に変換する能力としての文化力にどのように貢献するか考えてみよう。

日本文化とは何かというのを一口に言うのは難しいが，免疫学者で能楽にも造詣が深かった多田富雄氏は，日本文化の特色として次の４つをあげている[駄田井・浦川（2011, p.106)]。

①山川草木に神が宿る。多神教，自然崇拝，アニミズムの伝統。

②象徴力，簡潔性を好む。

③ものあわれ，無常観，判官びいき。

④匠の技。細部まで突き詰める。日本工業技術のルーツ。

これらの特質は，幸福や心の満足を物量の豊富さよりも，その質に重きをおくということにおいて，文化力を高めるものと思う。その点において，日本の文化は成熟社会において貴重な存在になる。ちなみに文化人類学者で有名なレヴィ・ストロースは今度は西洋が日本から考え方や生活文化を学ぶべきであるとし，ガルブレイスも日本が先導すると言っていて日本文化への評価は低くない[佐野（1982, p.85)]。

森羅万象，山川草木に神が宿るという日本人の感覚は，ものづくりでは，素材にできるだけ手を加えずに，そのまま自然のままで使用することを好む。手を加える場合も，出来上がりがいかにも手を加えていないように装うことを好む。

この特性は，日本料理にもよく現れる。刺身に代表されるように，味付けも素材を活かし，塩味か醤油につける。盛り付けの場合も素材が分かるように形を崩さない。このような日本料理の特徴は，西洋

料理や中国料理と比べても明白である。東南アジア，あるいは隣国の韓国に比べても違いがある。

建物に関しても伝統的な木造建築は自然の素材を活かしていて，構造が見えて，構造がそのまま内装になっている。柱を壁に塗り込まないし，壁紙を張ってしまわない。その典型が茶室に現れている。

日本庭園は自然を写している。手を加えているがいかにも自然の姿をとどめるようにしている。日本庭園は理想的な自然の姿をつくり出すことをもとめていて，幾何学模様の人工的な西洋庭園とは対照的である。

日本固有の宗教である神道の拝殿（神社）は，一般に木立に囲まれた自然の中にあり，外塀がない。一方，外来のものである仏教寺院は堅固な塀で囲まれている。

日本文化の特色は古代から綿々と続いているが，文化力に関する生活文化に関しては，その多くは江戸時代の閉鎖社会で培われたように思う。江戸初期に実施された鎖国政策に関して，その功罪については様々な評価があるが [18]，この点に関してはあまり異論がないようである。日米両政府に発禁処分を受けた大川周明の著作『二千六百年史』(2021，pp.189-221）によれば，本来の日本人は，好奇心に富む創造的な進取の気象であるが，江戸の鎖国によって外に資源を求めることがかなわず，国内資源を徹底的に活用することに向けられた。この資源の制約の下で物を大事に使うことで廃棄物をできるだけ出さず，出した廃棄物も再利用するという循環型社会へ向かうことになる。

また内乱もなく平和が長く続いたことで，生活文化が洗練された。それまで公家や僧侶が独占していた芸術や文化もその垣根が取り除かれ,武士や町人はては農民までに広がることになる。林（1982,p.28）は，江戸期において農村社会は見事に仕上げられ，その熟成度はイギリス以上であると述べている。そうであるからこそ日本人の進取の気象とあいまって，明治以降の近代化に成功したと言える。

6．成熟社会の家族・コミュニティと女性の役割

子育て介護など家人が行なう家事一般は金銭の取引が介在しないので，GDPに計上されない。物的豊かさを経済力に置き換え，経済力をGDPで計算すると，家事を外部化したり，家事を便利にするために家庭電化器機などが普及するほど，文化力の定義式（1）に基づけば，分子が変わらず分母が大きくなるので，社会全体として幸福度に変わりがなければ，文化力は低下することになる。したがって，女性の社会進出が歓迎され，若い世代では共稼ぎが普通になってきているので，幸福度が高まらならなければ文化力が低下する。幸福のパラドックスが発生する一因であろう。

女性が社会進出することで，女性の幸福感が向上するとの見方があるが，一概には言えない。働くことで職場でのストレスや時間的に余裕がなくなるので，家事の外部化や省力化が進む。手の込んだ料理

ができなくなるので，外食するようになる。子育ても外部化すると，子どもとの接触時間が減少する。親は子育ての煩わしさから解放されるが，子どもの幸福感はどうだろう。人格の形成に影響はないだろうか。社会全体にとって，育児や介護など家事一般は，外で働くのと同様に価値ある仕事である[(19)]。また外部化された家事サービスの質がよければよいが，外部化された家事サービスが市場経済化されると，受けるサービスの内容は価格に左右される。良寛さんは料理人の料理，書家の書を嫌ったそうだ。金儲けを目的とするものには人々を本当に喜ばせる文化力がないのかも知れない。

日常生活で生じる困難に対して自助・共助・公助による対処がある。自助は家族やそれに準じる範囲で行われるもので，共助は地域コミュニティやボランティア組織によるものであり，公助は行政やそれに準じる組織によるものである。女性の社会進出がすすみ，核家族も崩壊の兆しがある現在では，従来家族が担ってきた子育てや介護などを，共助や公助に依存しなければならなくなってきている。

経済力より文化力に重きを置く成熟社会では，文化力を高める教育や人間の幸福感に直結する介護などケア経済の分野が重要になる。この分野を公助によるフォーマルケアに依存することは，財政負担が重くなるという問題があるうえに，そのケアが画一的になり個々人の多様な要望に対応できないと言われている。共助に期待しなければならない[(20)]。

地域コミュニティやボランティア組織による活動は，費用弁償はあっても一般に報酬はないので，そのサービス価値がGDPに計上されるのはその一部である。したがって，共助の役割が増加することは文化力の向上に結び付く。

7．おわりに

人類が直面している危機を回避するには，物的消費の成長に固執せず，文化力の向上を目指すべきである。その意味で「成熟」を自覚しなければならない。その成熟した文明社会の様相を文化経済学の視点から表現することを試みた。成熟した文明社会では，文化力の向上が鍵となるが，文化力という概念は厳密には指数化できないし，文化の多様性を尊重する立場からは厳密に指数化するのは意味がない。指数化したとしてもせいぜいその国の風土や文化の特色を示す一つの指標でしかない。日常生活を注意深く観察しながら具体的に記述するしかないだろう。

そのような意図から，本論では日本文化と文化力の関係，そしてコミュニティと文化力の関係について考察したが，導入にもなっていない。このテーマについては後日の課題としたい。

注：

1）Mill（1848, Chapter 6, Book Ⅳ）
2）1980年代以降の世界経済の流れでは，次のような出来事があげられる。
1986.4　チェルノブイリ原発事故　　1987.5　ペレストロイカ始る
1991.12　ソ連崩壊　　1992.4　湾岸戦争　　1997　アジア通貨危機
2003.5　イラク戦争　　2005.1　京都議定書発効
2006-2007　サムプライムローン危機　世界金融危機に
3）以下の議論の詳細は，駄田井・浦川（2011）を参照
4）物質的豊かさを経済財，すなわち人間がそれを獲得するのになにがしかの犠牲を払うものと限定しても，それをGDPで置き換えるのが妥当かどうかは議論の余地がある。第１番目にはそれはフローでありストックを除外している。第２はサービス（無形財）が含まれ，ポスト工業社会ではそれがGDPの大部分を占めているという事実である。その回答として，サービスの提供にはそれを提供する施設やインフラが必要であり，フローとしてのサービスがそれらのストックを代理しているとみなすことも。あながち不可能ではない。その意味ではGDPは物的豊かさの指標ではなく，経済財を生産する能力（経済力）の指標と考えるべきであろう。
5）伝統的社会が崩壊することで，苦しみを味わった人は少なくないと思われるが，結果的には幸福感は増したのではなかろうか。工業社会の生産技術は科学技術と二人三脚で向上する。科学技術は医学の発展にも貢献するので，道徳に果たした役割が大きい。Gabor（1972, 邦訳 pp.85-86.）は，その役割として①迷信を追放したこと，②肉体的苦痛を取り除いたこと，あげている。その結果，肉体的苦痛は人間生活の上で避けられるものとなり，残酷さを嫌うようになったとしている。
6）福沢（1875）。したがって「市民社会」は平均的市民の経済力と教養の水準がある一定水準以上になって成立する。
7）例えばBinswanger（2008）
8）プレミアムがついた地域振興券による需要も，大半は本来購入する予定であったものを購入するのが大半で，新規の需要をどれだけ誘発したかは疑問である。GO TO　キャンペーンもGO　TO　EAT　もコロナが治まれば来る顧客を一時的に早めただけで，長い目で見れば新規需要の開拓になったかどうかは疑わしい。しかもこの優遇策を利用できる人は限られている。時間とカネに余裕のある人達だろう。そうするとこのキャンペーンを利用したくてもできなかった人はどうなるか。税金はこの不公平を生み出さすのに使われたのである。このような政策が常態化すると，企業は政府にたより企業努力を怠ることになる。一時給付金の方がよい。経済政策はマクロ需要創生策でなく，個別的に，強靭な国土，環境保全，持続可能性，文化力の向上，経済格差是正などの視点から実施するべきだろう。
9）孫子に「百戦百勝は善の善ならず」とあるように，戦争を続けると勝ち続けても必ず国は疲弊する。常に戦いのストレスがあると精神的疲弊で人々の心がすさむ。したがって戦いが必然であるときも「戦わずして勝つ」が上策である。そのためには「一つの寺院は百万の兵に匹敵する」とあるように，暴力的権威を非暴力的権威で置き換えて支配するのが好ましい。
10）Boulding（1970b, p.9）
11）Feinstein（2015,邦訳（上）p.19.）は, 産軍複合体の存在を「政府と軍部, 武器産業の間を人が行ききする「回転扉」と表現している。また，アイゼンハワー大統領が退任のあいさつの中で，産軍複合体が政府の中で不当に影響力をもつことを警告していたことは周知のことである。しかしFeinstein（前掲（下）p.96.）は,「ブッシュ政権では，戦争成金が政府に近づこうと騒いでいただけではない。彼らこそが政府であった。」と述べている。
12）Levin（1970, pp53-81）は，戦争は社会の基本的システムであるとして，その役割を次のように述べている。①経済に関して，軍事支出は大きく，独立した支出でビルトインスタビライザーとして働く。福祉支出はその代替にならないが，宇宙開発はその代替になる。②戦争への恐怖が政府を成立させる。戦争がなくなったら，国家主権と伝統的国民国家がなくなる。軍隊の支出は貧しい人を入隊させ，訓練させる。現実の敵がいなくなったら「仮想の敵」を作らねばならない。③社会的には, 軍と兵役が反社会的人間を社会的人間にする。代替は奴隷制である。④生態的には，戦争による人口調節は優生種を残す。しかし，核戦争は優生種も劣性種も殺すので，人工授精で

優生種を残さねばならい。この点に関し，軍事支出の経済効果に関しては，医療や教育へ支出の方が経済効果が大であるとの見方がある[Feinstein（2015,邦訳（下）p.194.)]。

13）Stoessinger（2011, 邦訳pp.287-288）は，戦争を人類の病気とみる。病気とすれば，コロナ感染症のように世界が敵味方なくその撲滅に協力する。

14）佐野（1978, p.9）

15）特にGabor（1972,邦訳p.92）では，「単純な事実は，人間に特別に与えられた才能は，民主的には分配できないということである。」と述べている。

16）Galbraith（1958,邦訳p.7)。佐野（1989,p.72）は，日本人は貧に処する道は学んできたが，富に処する道を学んでいない。それがこれからの教育の大問題であるとしている。

17）代表者の選出を投票ばかりによるのでなく，くじ引きにより選出するなど工夫すれば，権力耽溺者が権力の座に就くのを防げるかもしれない。くじ引きによる選出については吉田（2021）にくわしい。

18）特にスペインのカソリック布教と一体化した植民地化政策を挫折させたことは評価できる。

19）Sloughter（2017）を参照。

20）松岡（2021, pp.358-364）によれば，これからの日本のケアは次のことが重要になる。
①「できないこと」から,「できること」「したいこと」へ。②「サービス提供原則」から「well-being追及原則」へ。③「専門職解決」から「地域解決」へ。④利用者は「保険料を払っているので，使わないと損」意識の脱却。⑤「給付」から「事業」へ。⑥「どれだけ介護サービスを出せるか」から，いかに介護しないかへ。⑦「市民の自立支援とwell-beingのための広範な環境整備」へ。専門職は，しばしばその専門性をしばらく脇において，制度による呪縛から解放されて，その人の生活全般について思いを馳せることからはじめる。⑧　地域にもっとインフォーマルな資源を，そしてつながって越える。「介護」を越えて―ソーシャルな課題に向き合う。

参考文献

Boulding, K. E. ed.（1970a）*Peace and the War Industry*, Trance-action Book, Aldine Publishing Company.

Boulding, K. E.（1970b）“The Deadly Industry: War and the International System”, in Boulding（1970a, pp.1-12）.

筑後川入道九仙坊（2021）『九州独立と日本の創生』新評論

駄田井正・浦川康弘（2011）『文化の時代の経済学入門』新評論

Feinstein, A.（2015）*The Shadow World ― Inside the Global Arms Trade.*（村上和久訳『武器ビジネス』原書房, 2015年）

Gabor, D.（1972）*The Mature Society*, Secker & Warburg Ltd.（林雄二郎訳『成熟社会－新しい文明の選択』講談社　1973年）

Galbraith, J. K.（1958）*The Affluent Society*, Houghton Mifflin.（鈴木哲太郎訳『ゆたかな社会』岩波書店, 1960年）

濵﨑裕子（2008）『コミュニティケアの開拓 ― 宅老所よりあいとNPO笑顔の実践に学ぶ』雲母書房

林雄二郎（1982）『成熟社会―日本の選択』中央経済

Levin, L. C.（1970）“Report from Iron Moutain”, in Boulding（1970a, pp.53-81）.

松岡洋子（2021）『オランダ・ミラクル』新評論

Mill, J. S.（1848）*Principles of Political Economy.*

大川周明（2021）『日本二千六百年史』毎日ワンズ

佐野洋（1989）『日本的成熟社会論 ― 20世紀末日本と日本人の生活』東海大学出版会。

Sloughter, A. M.（2017）*Unfinished Bussins ― Women Men Work Family.*（関美和訳『仕事と家庭は両立できない？－「女性が輝く社会」のウソとホント』NTT出版）

Stoessinger, J. G.（2011）*Why Nations Go to War.*（等松春夫監訳・比較戦争史研究会訳『なぜ国々は戦争をするのか』図書刊行会，2015年）

Tuchman, B. W.（1984）*The March of Folly: From Troy to Vietnam.*（大社淑子訳『愚行の世界史―トロイからベ

トナムまで』，中央文庫，上・下，2009年）
吉田徹（2021）『くじ引き民主主義―政治にイノベーションを起こす。』光文社